



Vol.20
October 2014

A r t & C u l t u r e



副学長 文化・芸術研究センター長

高田和文

Kazufumi Takada

センターの情報発信機能の さらなる強化に向けて

本年4月より、公立大学法人静岡文化芸術大学の文化・芸術研究センター長を務めることとなりました。

本センターは開学以来、静岡文化芸術大学における独自の研究活動を担い、かつ文化の領域における地域の交流拠点となるべく様々な事業を展開してきました。それらは地域の人々や地元産業界から一定の評価を得るとともに、大学の知名度や存在感の向上に大きな役割を果たしてきたものと考えます。

けれども、大学の成長・発展、また社会の変化にともなってセンターの活動に新たな展開が求められていることも事実です。取り組まねばならない課題はいくつもありますが、中でも最も重要と思われるものを3つ挙げておきます。

1つは、情報発信機能の強化です。センターが行っている研究活動や事業にはたいへん重要でしかもユニークなものが多いのですが、それが十分に一般の人々に伝わっていないように思われます。私自身は、センターの活動を充実させるのと同程度あるいはそれ以上の努力を、その活動に関する情報発信に向けねばならないと考えています。ともすれば専門家や研究者の内部に止まりがちな研究の成果を、わかりやすい形にして広く一般の人々に知っていただくことが何よりも大事です。それは公立大学という公の機関が行っている活動について、説明責任を果たすことでもあります。

まずその第一歩として、このニュースレター「文化と芸術」の本号においては、通常の活動報告に加えて、2013年度の本学の研究活動・イベント事業等の全体像を紹介することとしました。また、本年度中には、学内の主要な特別研究事業について、地域の方々にも開かれた形で成果発表会を開催する予定です。これらの研究については、これまでも当該専門領域の学会、国際会議、シンポジウム、学会誌や専門誌、大学紀要等において個別に発表を行ってきましたが、今回の試みはその内容を一般の人々にも理解しやすい形でお伝えしようというもので

CONTENTS

巻頭寄稿	1
活動紹介	2~3
公開講座紹介	4~5
活動紹介	6~7
2013年度研究事業等一覧	8~11
インフォメーション	12

静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター

静岡県浜松市中区中央2丁目1-1 〒430-8533

●Tel:053-457-6113 ●Fax:053-457-6123 ●http://www.suac.ac.jp/

す。これを1つの契機として、今後とも様々な形で情報発信・情報公開を進めてゆきたいと考えています。

2つめは、地域との連携の強化です。この4月に大学事務局に新たに地域連携室が設置されました。これによって、地域の人々や企業・団体と大学との窓口が一本化されたわけです。本センターもまた、地域連携室のもとでよりいっそう地域に密着した事業を展開することになります。これによって、文字通り「文化の領域における地域の交流拠点」となるための本格的な体制が整ったと言えます。

地域との連携を考える上で重要なのは、静岡県や浜松市などの自治体や他の文化機関・団体との協力関係の強化です。とりわけ、県の主要な文化施設であるSPAC（静岡県舞台芸術センター）や静岡県立美術館、浜松市文化振興財団等との関係強化は、地域の文化振興という点から喫緊の課題と言えます。その意味で、この10月に本学講堂において行われるSPACによる現代劇公演『綾の鼓』は、将来の連携強化につながり得たいへん意欲的な試みです。

また、本学は昨年度末に、浜松市との間に連携協定を結びました。さらに、4月に入って本学はイタリアのポローニャ大学と、浜松市はポローニャ市と交流協定を締結しました。古くからの大学都市であり、近年は音楽創造都市として脚光を浴びつつあるポローニャとの関係強化は、本学と浜松市や市の文化振興財団との協働をよりいっそう加速させるに違いありません。実際、この11月には、浜松市主催の「知と文化の交流事業」が本学で開催され、さらに12月にはポローニャの文化をテーマとした後期公開講座が実施されます。

3つめに、センターの最も重要な課題として本学独自の研究のさらなる充実があります。重点目標研究領域として定められている「多文化共生を含む文化政策」、「ユニバーサルデザイン」、「アートマネジメント」に関わる研究は、全国的に見てもたいへん独自性の高いものです。とりわけ、アートマネジメントの領域においては、昨年度から文化庁の「大学を活用した文化芸術推進事業」の1つに採択された「文化施設・実演芸術団体のためのアートマネジメント実践ゼミナール」を実施しています。この分野における本学の研究は、全国でもトップレベルにあると自負しています。これら3つの重点目標研究領域を柱としながら、本学教員の専門性を生かした裾野の広い研究活動を続けて行く必要があり、本センターはその司令塔としての役割を担っています。

来年、2015年に静岡文化芸術大学は開学15周年を迎えます。これを1つの節目として、文化・芸術研究センターのこれまでの活動を振り返り、将来に向けてよりいっそう充実させるべく努力してゆきたいと考えます。

国産米を使った非常食の開発

米屋武文 (文化政策学部文化政策学科)

私の非常食との関わりは、平成24年度の県防災コンソーシアムが主催するふじのくに防災学講座での講演依頼を受けてからである。それまでの約10年間、米の消費拡大・食料自給率向上の旗印のもと、米粉を使った加工食品（パン、麺、菓子）の開発研究を主に地元企業と連携して行なっていたことから、この講演では災害への備えとして欠かせない非常食への国産米粉を使う必要性を主張した。

非常食とは、災害のために備蓄される食料で、保存性（貯蔵期間の長さ）と備蓄性（コンパクトな備蓄）が重要なポイントとされる。今では多くの非常食が出回っているが、それでも、先ず思い浮かぶのは乾パンであろう。実際、多くの自治体で備蓄率の高い食品であるし、家庭での非常持出袋の中身としても必須のものである。この乾パンが何から作られているかという、主原料は普通のパンと同様に小麦粉である。しかしながら、この乾パンの主原料の小麦の産地まで考えて利用する人はそう多くはないと思われる。

わが国の小麦生産量は年間約74.2万トンで、約556.8万トン海外からの輸入に頼り、自給率は12%程度である(平成23年度)。従って、私たちが普段食べている小麦加工食品はおおむねアメリカ、カナダ、オーストラリアからの輸入小麦から作られている。手元に正確な数字はないが、乾パンもその殆どは輸入小麦を主原料として製造されているとみて間違いない。国家的危機ともなりかねない大規模災害時のために備蓄される食料が、実は輸入原料から出来ているというのは、食料安全保障の観点からも決して好ましいものとは思えない。丁度、昨年11月に、地震・防災に特化した研究活動を助成する本学学長特別研究の募集があり、応募したところ採択されたので、地元企業と共同で国産米を使った非常食用乾パン（ラスク）の試作を始めた。

私は浜松に移り住んで30年以上になるが、いつも感心するのは、ものづくり産業の充実度である。今回の開発研究に際しても、製パンはもとより、ラスク作りのノウハウを地元企業の（株）ヤタローが持っており、そこで活躍している本学卒業生の橋渡しもあって、共同開発はスムーズに進めることが出来た。

次に、米粉を使ってパンを作る場合、問題となるのは、パン生地の発酵により膨化して出来たスポンジ構造保持の役割をするグルテンというタンパク質が米粉には無いということである。そのため、米粉を使ってパンを作る場合は、米粉と小麦粉を混ぜたり、あるいは、米粉に小麦から取り出したグルテンを加えて作るのが普通に米粉パンといわれているものである。私どもはグルテンを使わず米に含まれるデンプンの糊化という現象を活用した米粉100%のパンを開発済みではあるが、このものは食感に関して好みが変わるため、今回は、食べた際に小麦粉パンと食感があまり変わらない米粉と小麦粉のミックス粉で試作することにした。また、小麦粉も国産品を使用することにした。

ここで問題となるのは、米粉と小麦粉の配合割合である。いきなり米粉の割合を高めて食感が異なるものを作るのではな



写真1 米粉10%（左）と米粉30%（右）のパン

く、通常の小麦パンのイメージを損なうことのないパンを作り、それを更にもう一回焼いてラスクとすることにした。最初の製パンの段階では、米粉の割合が増えるに従って焼成したパンの膨らみが減少した。写真1は米粉10%と30%で作った

パンの例である（左が10%、右が30%）。これを適当なサイズに切ってもう一回焼いて最終製品のラスクにするが、学内の職員による試食の結果は、好みが変わった。私どもの予想に反して、生地の膨らみが少ない米粉30%の方を好む人が多めとの結果であった。今回は、試作品の好みが変わったことと、時間的制約もあり、中間の米粉含量20%のものを最終試作品とした。また、試作品のラスクはアールグレイ、ラズベリー、チョコの3種類の味付けを施した。保存期間5年と備蓄性を担保するために缶入りとした。缶のラベル作成は、本学デザイン学部卒業生の（株）ヤタロー社員が担当した。このラスクは食味の良さもさることながら、小麦粉100%のものより粘性を示すグルテン含量が相対的に少ないため、食べた際の口溶けが良く、災害時における被災者の口中の衛生状態を良好に保つ効果も期待できると考えられる。

今回は、小麦グルテンの示す粘弾性を最も必要とする製パンへの米粉の活用ということで、米粉使用量を低めでラスクの試作を行なった。同じ小麦粉の加工品である菓子・ケーキ類は逆にグルテンを必要としない製品であるので、今後は国産米粉100%でケーキ用スポンジを作り、今回のラスクとは別の非常食の開発が出来るのではと考えている。

わが国の食料自給率は先進国の中で最も低く、4年連続39%である。世界無形文化遺産に登録された和食が輸入食材で作られるようでは世界に示しが見えない。うどん県を標榜する香川県は、讃岐うどんの93%が豪州産小麦で作られていた反省から、地元産のうどん用小麦品種の育成と使用に切り換えつつある。また、元々輸入原料への依存度が高いビールにおいてさえも、消費低迷に苦しむ大手メーカーが、打開策として、国産の大麦、ホップを前面に打ち出す商品を開発するところが出てきている。味だけでなく、安全・安心面でも海外産よりも優位性のある国産食材をより厳格な表示制度のもとで活用すればブランド力が強化され、それを支えるわが国の農業も成長産業となり得るであろう。今回の研究はその一助となれば幸甚である。



写真2 缶入りラスク試作品

活動紹介

(平成26年度 イベント・シンポジウム等開催費)

Festa Julina na SUAC

池上重弘 (文化政策学部国際文化学科)

宮城ユキミ (文化政策学部国際文化学科 3年)

2014年7月12日に、本学で「Festa Julina na SUAC」が開催されました。これはブラジルの伝統的な祭り「フェスタ・ジュニーナ（6月の祭り）」をSUAC風にアレンジして行ったイベントです。7月の実施だったので、「フェスタ・ジュリーナ（7月の祭り）」としました。

このイベントのきっかけは、「大学でフェスタ・ジュニーナをやってみたい」という私たち学生の声でした。ブラジルでは、フェスタ・ジュニーナは毎年学校ごとや地域ごとに開催されるイベントで、私たち外国にルーツを持つ学生にとって懐かしいお祭りです。

池上教授に案を持ちかけたところ、大学のイベント開催費をいただくことができました。「Festa Julina na SUAC」を開催するにあたって、3つの目的を定めました。1つ目は、日本人にブラジルの文化を身近に知ってもらうこと、2つ目は、ブラジル人のコミュニティに日本の大学、特に文芸大を知ってもらうこと、そして3つ目は、私たちのように外国にルーツを持つ学生の存在、活動を知ってもらうことです。これらを達成するために、学生実行委員会を立ち上げました。

実行委員会のメインとなったのは、ブラジルにルーツを持ち、フェスタ・ジュニーナを知っている学生たちでした。それぞれ衣装、屋台、食べ物やダンス等の係に分かれて、リーダーを中心に準備を進めていきました。

当日は3つのイベントがメインとなりました。1つは、クアドリーリャというフォークダンスのような踊りです。大学に来てくださったブラジル人学校エスコラ・オブジェチーボ・デ・イワタの生徒たちと、実行委員会のメンバーで踊りました。実行委員会の学生のほとんどは、初めて踊りましたが、ポルトガル語の司会に合わせて、ブラジル人学生の通訳を聞いて、見よう見まねで楽しく踊りました。2つ目は、ウイラブル・プロジェクトのコンサートです。浜松市内で音楽活動をしているブラジル人のナタナエルさんが率いる団体で、若者たちが活動の中心です。彼らの活動をもっと多くの人に知ってもらえたらと思い、地域連携の一環として取り入れました。

そして、文芸大をもっと知ってもらうために、ポルトガル語、日本語の両言語でキャンパスツアーを実施しました。当日は土曜日で実際の授業は見られませんが、図書館や屋上、大講義室や中講義室を案内し、学生の生の声を届け、さらに授業料などの簡単な説明も行いました。

イベント当日は、台風の影響が心配されましたが、晴天に恵まれました。暑い中、約200人の方が来場してくださって、とても盛り上がりました。

私自身は実行委員長としてこのイベントを通して多くの経験ができました。運営に関しては、「予算」「会場」「物品」「時間」「企画」を意識する重要性を学びました。さらに、「どのようなイベントなのか」や「なぜ大学の広場を使用するのか」といったコンセプトの明確化や、規模の推定、集客見込みの概算、

協賛金の確保なども全部自分たちで行いました。大変な局面もありましたが、実行委員一丸となって当日まで準備を進めました。もう1つの大きな経験は、仲間の大切さを痛感したことです。実行委員のメンバーはもちろんですが、協力をいただいたすべての方々の有り難い支援により、イベントは大成功でした。
(宮城ユキミ)

今回のフェスタ・ジュリーナは、本学に在籍するブラジル人学生の発案によるイベントである点が大きな特色となっている。学生実行委員会のメンバーも25名中8名がブラジル人であった。100人を超えるブラジル人が本学に集まったのは開学以来初めてである。そして何よりも、定住化が進み、日本の大学に進学したい、あるいは子どもを進学させたい、という気持ちを持つブラジル人が増えているなかで、本学のブラジル人学生たちがロールモデルとしての姿を子どもたちやその保護者に提示できたことの意味が大きい。
(池上重弘)



クアドリーリャを踊る学生とオブジェチーボ校の生徒たち



ウイラブル・プロジェクトの演奏会（音楽室にて）



フェスタ・ジュリーナ学生実行委員会のメンバー

平成26年度前期公開講座 「和食の世界」を開講

平成26年度前期公開講座が6月21日から7月19日までの毎週土曜日、全5回にわたり開講されました。今回の公開講座は昨年12月、ユネスコの世界無形文化遺産に「和食：日本人の伝統的な食文化」が登録されたことを受け、全体のテーマを「和食の世界」とし、「世界無形文化遺産登録に向けた検討会」（農林水産省）の会長を務めた本学・熊倉功夫学長をはじめ、学内・学外の講師が「和食」に関わる様々な話題をそれぞれの専門の視点から講義しました。登録決定以来、様々なメディアで「和食」が取り上げられたこともあり、講座に対する関心は非常に高く、各回とも聴講者は150名を超えました。

<講義の採録>

第1回「世界無形文化遺産となった和食」（6月21日）

熊倉 功夫（学長）

世界無形文化遺産登録の決定以来、「和食」に対する関心が高まり、取材などの依頼が続いている。その際よく「〇〇は和食ですか？」という質問を受けるが、「遺産」として認められた和食とは、一つひとつの料理を指すのではなく、日本人の中で古くから受け継がれてきた食文化、それを取り巻く環境など多面的な要素全体を指すものである。また世界各地にある様々な食文化と比べて和食が「優れている」ということではなく、日本独自の特色を持っていることが重要である。

和食は「器を手に持ち、直接口を付けて箸で食べる」、「家庭では飯茶碗や箸などは個人専用」など食事法、食器の特徴もあるが、基本は主食である「ごはん」を美味しく食べるための食事であること。「一汁三菜」といわれるように「ごはん」「おかず」とともに汁物が欠かせない。また日本の自然環境から生み出される豊かな食材、「旬」「はしり」「なごり」など季節の変化を楽しむ食事も和食の特徴といえる。

伝統的な和食は栄養の面では「不足」の状態が続いてきたが、高度経済成長期には量的にも質的にも十分になり、非常にバランスの良い食事内容になった。しかしこの頃から日本人の「コメ離れ」が始まり、伝統的な和食が変化し始めた。最近ではコンビニ弁当などの普及もあり、食材の海外依存、脂肪の過剰摂取などの問題が指摘されるようになってきている。

四周を海に囲まれ、寒流と暖流がぶつかる絶好の漁場に恵まれている日本は海産物が非常に豊富、降水量も多く国土は緑に包まれている。恵まれた自然、美しい国土は豊富な食材にも恵まれている。しかしながら現在の日本の食糧自給率は40%を切り、一方で年間800万トンの食糧が廃棄されている。伝統的な食べ物と我々との濃密な関係が崩れつつある。このような状態は「和食の危機」といえることができるであろう。日本の農業や漁業の環境を守り、和食という食文化を次の世代に受け継いで行くことが求められている。

第2回「和食とユニバーサルデザイン」（6月28日）

小浜 朋子（空間造形学科）

ユニバーサルデザイン（UD）は、「障害者のための設計」ではなく、「万人が使える設計」というコンセプトを持ち、すべての人の自立を妨げることなく、公平に便利なサービスを提

供することである。日本は今後、人口の高齢化が益々進むが、単に長寿というだけでなく、「自立して長寿」であることが求められる。「自立して長寿」をどのようにサポートするのもかもUDの大切な課題である。

食事をする場所、あるいは食事を作る場所であるキッチンの水回りや調理器具、食事の際に使う様々な食器にもUDの考え方が活かされているものが多い。障害者と介護者が同じ環境で食事ができるレストラン、使い勝手が良く、使い方も簡単で便利なティーポットやボトル、収納性に優れた茶道具など、UDの7原則「公平性」、「柔軟性」、「簡単・明瞭な使用法」、「わかりやすい情報伝達」、「安全性」、「身体・知覚への負担軽減」、「使用空間の確保」に「価格の妥当性」、「審美性」を加えた9つのUDのポイントからみても、優れた機能を持った空間や道具には様々な工夫がなされ、生活を豊かにするものとなっている。

私たちは通常、食材や調味料などの容器、調理の具合などについて、色で判断することが多いが、白内障や色弱の人たちは見え方が違っている。違う見え方をする人たちの調理や食事の環境づくりにもUDが活用される。

どんな人にとっても、またどんな場所においても、食とコミュニケーションは生きる支えとなるものである。食事が単なる栄養摂取ということにとどまらず、食べることを楽しむことができるか、という視点も大切なことである。人口の高齢化とともに一人暮らしをする高齢者も増加していくが、仲間と食べる楽しさを支援するなどUD化された食とコミュニケーションを広げて行くことは高齢社会の重要な課題となるであろう。

第3回「日本史と食文化」（7月5日）

磯田 道史（国際文化学科）

料亭・料理屋、すなわち「建物の中で比較的高級な料理を食べる」スタイルのひとつの始まりは京都の円山にあった「六阿弥」といわれている。「阿弥（あみ）」とは南北朝の頃から、「〇阿弥」と名乗ることによって僧でも俗でもない、中間的な存在として、身分制を超えて権力者と会うことができる者で、多くは特殊な技能を持っていた。代表格は観阿弥、世阿弥親子で、このような人たちが最高権力者の話し相手、相談相手、技術協力者になると「同朋衆」と呼ばれる。同朋衆の中には庭師や能楽師のほか、料理人などもいた。阿弥号を持つ6人が、庵（いおり）を結び、そこで高級な料理が食べられる場所を作ったのが円山の六阿弥で、その中の「左阿弥」が織田政権の時代に発展した。左阿弥を保護し、発展させたのは信長の弟の有楽斎である。信長はテクノロジーに対する執着が強く、京都を制圧した後、自分の下に最高の技術者を集めた。その中には料理人もいたのである。

江戸時代の後半、1750年頃から裕福な商人たちが庶民社会、庶民の文化を作り始め、江戸の料亭文化が本格的に広がりを見せ始めた。八百善など有名な料亭では、非常に贅沢な料理を出すようになる。料亭の利用客は各藩の江戸留守居役と材木商。江戸は火事が多く、材木商が大きな利益を得ていた。

鰻（ウナギ）を食べる習慣は古い。万葉の時代から既に夏バ

テ防止の滋養強壮効果が知られていた。信長が安土城で徳川家康を接待した豪華料理にも鰻が使われていた記録がある。18世紀の半ば頃、享保年間には蒲焼が一般的となった。平賀源内が鰻の販売促進のため「本日丑の日」と店先に貼ることを勧めたのは有名な伝説。その後、ご飯と鰻が結合し、どんぶり飯の上に鰻を載せて食べるようになったのは18世紀後半の天明の頃である。江戸は鰻屋が大変多く、鰻屋番付に掲載されているだけで221軒、おそらく全体では300軒程度あったのではないかと。最後の将軍、徳川慶喜も鰻が好物で、鳥羽伏見の戦いに敗れ、上方から江戸に逃げ帰った際、すぐに部下に命じて大黒屋という鰻屋に買いに行かせたという話もある。

第4回「家庭の和食」(7月12日)

後藤 加寿子(料理研究家)

家庭の和食はご飯を主食とし、旨みを中心とした料理がおかずになる。ご飯が中心の家庭料理とお酒が中心の料亭の料理は違うが、近年は区別がつかなくなりつつある。家庭の和食はご飯とおかずを順番で食べる。ご飯は基本的に味がなく、おかずを口の中で混ぜること—口中調味—で、食べやすくなる。構成は一汁三菜が基本、三菜には主菜と副菜。香の物は、最近では即席漬け、浅漬けのものが多く、糠漬けなど乳酸発酵した香の物が少なくなっている。

季節ならではの素材を頂くのが和食。季節のものが一番美味しいし、季節のものを食べて、身体の調子を整えるという効果もある。春の山菜は苦味があるが、冬の寒さから身体が目覚める春の季節には苦味が求められる。

和食の味付けは「おだし」がポイントになる。「おだし」は食材を後ろから引き立てる黒子のような存在だが、昆布は干した後に蔵の中で2~3年寝かせてから出荷するなど、使う前に手が掛けられているので、「おだしを取る」のにさほど手間はかからない。鰹節は製造の過程でカビ付けが行われ、発酵してうまみ成分が生成されている。また和食は、砂糖、塩、酢、醤油、味噌、みりんなどシンプルな調味料で素材の味を活かす。醤油、味噌なども非常に優れた発酵食品で奥が深い。「おだし」とシンプルだが奥が深い調味料によって食材の良さを活かすのが和食の味付けの特徴である。

東京オリンピック(1964年)以後、日本の家庭に本格的な世界の料理が入ってきた。洋風の方がお洒落な感じがして、従来の和食を物足りないと感じるようになった。現在の30~40代の女性には伝統的な和食を知らない人が増えている。昔は当たり前のようにできた家庭料理ができない。ファストフードやお惣菜の普及で、外で買ったものをそのまま食べることも増えた。和食中心の家庭の食事は変質して、「その家の味」というものがなくなりつつある。時代の変化もあり、昔の和食の良さを残しながら、今の時代に合う新しい和食のあり方を作っていくべきであろう。いつの時代も、食べることは楽しいこと、楽しく食べられる和食が次の世代に継承されて行ってほしいと思っている。

第5回「日本食文化の変遷と今後の展望」(7月19日)

米屋 武文(文化政策学科)

ジェットロの「好きな外国料理」調査では日本料理が21.1%でトップ、次がイタリア料理の12.8%、タイ料理の10.5%であった。日本料理は日本の風土の中で独自に発達した料理で、季節感を重んじ、新鮮な魚介や野菜を用い、刺し身や煮物、焼き物、汁物、寄せ物などに材料の持ち味を活かして調理し、強い香辛料をあまり使わない、器の種類や盛り付けなどにも工夫

を凝らし、見た目の美しさも尊重する。しかし1960年前後から日本人の食は変化し始め、最近では伝統が揺らぎ始めている。好きなものだけ食べたい、たくさんのメニューを並べるのは面倒、食材や器にも季節感が薄れ、「オールシーズン・ワンプレート」ということも多くなった。魚よりも肉食が好まれ、カレールーなどの簡便調味料や加工食品が増えた。食生活の欧米化に伴って、洋食を和風に、和食を洋風に仕立てる工夫も行なわれるようになった。また、コメの消費量は減少し、代わりとなるパンや麺などに使う小麦、さらには乳・肉・卵の動物性食材を得るための家畜飼料用穀物の輸入が増えている。

日本人の食事は古代から様々に変化してきた。弥生時代に水稻の栽培が広まり、やがて主食、副食という区別が始まる。その後、仏教の影響で肉食が度々禁止されたりしたが、鎌倉時代には一日三回食となって、精進料理が発達した。室町時代には武士文化と貴族文化が融合した本膳料理が始まり、安土桃山時代には茶道から懐石料理が生まれた。江戸時代には本膳料理が完成し、豊かになった町人たちは会席料理を生み出した。この時代に和食は完成したといえる。明治時代には洋食が入り、戦後の昭和30年代から伝統的な和食が少しずつ変化し、コメ離れも始まった。

日本人の食の歴史的な変化を振り返ると、海外の食材や調理技術をうまく取り入れながら独自の進化を遂げて来たことが分かる。これを和食の伝統と考えるならば、これからも新旧の料理が時代とともにうまく棲み分けしながら発展していくと思われる。

(文責：地域連携室／富田 晋司)

活動紹介

(平成26年度 イベント・シンポジウム等開催費)

「室内楽演奏会2014」前期の活動～広報戦略講座、北インド音楽、チンドン

梅田英春 (文化政策学部芸術文化学科)

細萱亜矢 (大学院文化政策研究科2年)

安食真悠 (文化政策学部芸術文化学科2年)

安藤美應 (文化政策学部芸術文化学科2年)

本年度の「室内楽演奏会2014」は、全部で5回の開催を予定しており、前期は5月から7月にかけて3つの講座、演奏会を実施しました。

1. 「文化系イベントのための広報戦略講座」(2014.5.16~17)

これまで室内楽演奏会では、演奏会、シンポジウムや講演会は開催してきましたが、今回初めて、広報について学ぶ公開講座を実施しました。

講師は、静岡県舞台芸術センター (SPAC) の広報アドバイザーをしている阿南一徳さん。1日目は「正解のない広報模擬試験」から始まり、「広報とは何か」という基本を考えることを中心とした講義となりました。参加者からは「基礎的で詳しい話が聞けてよかった」「広報の意味や理由が聞けて必要性がよくわかった」という感想を多く頂きました。広報が、ただ集客を考えるのみでなく、社会の共感を創ることや、実際に参加する人だけに向けて広報をするのではないということなど、広報についての概念が変わる貴重なお話を聴く機会となりました。

2日目は、チラシづくりワークショップを実施。12月に予定されている「スイーツコンサート」をテーマにして、グループごとにチラシデザインや、コピーを作り発表、阿南さんのコメントを全員で聞きました。グループごとにターゲットや戦略が違っており、デザインやコピーもユニークなものがたくさん出ていました。最初、難しいと感じていた参加者もいたようですが、「グループで意見を出し合って考えたことで色々考えることが新鮮で楽しかった」「今後の広報活動で実践していきたい」という感想の他、次回はより具体的なことを聞きたいという声もありました。(細萱亜矢)

2. 「北インド音楽を紡ぐー伝統楽器サロードとタブラの共演ー」(2014.5.23~24)



サロード奏者のデイビッド・タラソフ氏、タブラ奏者のU-zhaan氏、解説に田森雅一氏を招き、23日は翌日の演奏会をより深く楽しんでいただくためのインド古典音楽入門の講義と演奏者2名

による楽器を使ったデモンストレーション、24日は即興演奏を解説付きで行うコンサートを開催しました。

「音楽のまち」「楽器のまち」として売り出している浜松ですが、その「音楽」というのはピアノを中心としたクラシック系のものや吹奏楽など、従来私たちがよく耳にしてきたものがメ

インとなっています。しかし世界的に見ると、この「音楽」というのはほんの一部でしかありません。「音楽のまち」を名乗るならば、多種多様な音楽に触れられるのがあるべき姿ではないだろうか、という思いから今回の演奏会の計画が始まりました。数多くある世界音楽の中から北インドの古典音楽を取り上げることになりましたが、室内楽の学生スタッフは誰一人意識して聴いたことがない音楽で、初めて聴くことから始まった、まさしくゼロからスタートした企画でした。当日は予想を超えるお客様にご来場頂き、皆様の真剣なまなざしと涼しげな空間の中、インド音楽に浸ることができました。(安食真悠)

3. 「楽しいチン!どん!〜ジャパンカーニバル〜」(2014.7.16)

この演奏会では東京チンドン倶楽部を招き、今では数少ないチンドン屋の音楽をとりあげました。また室内楽演奏会としては初めて、屋上(南棟屋上「創造の丘」という屋外を舞台にしました。私達の大学にはこんな素晴らしい場所があるのに、普段あまり使われておらず、勿体無く感じていたことから実現したものです。実際にお客さんからも、普段地域住民に解放されていることも知らなかった、また来たいとお声を頂きました。学生からも、今回の演奏会を参考に屋上を使ったイベント企画をしたいという声もありました。それも「チンドン音楽」の持つ、世代・ジャンルを問わない魅力によるものと感じました。昨年度から室内楽演奏会の音楽ジャンルは多様化していますが、それでもやはり普段からその音楽に関心を持つ方しか演奏会に足を運ばない傾向があります。しかしチンドンの音楽が大衆音楽の中でもより身近なものであったことから、普段の演奏会とは違った興味関心を引くことができたのではと思います。昼休み中の「学内練り歩き」ではチンドン屋本来の「宣伝活動」が披露され、学外からも多くの方にお越し頂いて、学生ラウンジや学生食堂、出合いの広場は普段見かけない光景になりました。チンドン屋さんの軽快な喋りと演奏に拍手も起こっていました。夜の演奏会も、子供からお年寄りの方まで多くの人が屋上に集まり賑わいました。(安藤美應)



次回は、11月15日(土)に行われる「バンバン!ケンパン!はままつ」です。この室内楽演奏会を通して、多様な音楽世界を楽しんでいただくのと同時に、本大学の魅力を発信していきたいと思っています。

活動紹介

開幕！ 第7回静岡国際オペラコンクール

[11月8日(土)～16日(日) アクトシティ浜松大ホール]

静岡国際オペラコンクール実行委員会事務局

3年に一度、世界中から若手オペラ歌手が集まりその実力を競い合う「静岡国際オペラコンクール」(主催：静岡県、静岡県教育委員会、浜松市、本学他)。静岡県ゆかりのオペラ歌手三浦環をたたえ、没後50年にあたる1996年から開催し、7回目となる今回は、ヨーロッパ、アフリカ、アメリカ、オーストラリアなど世界各国(27の国と地域)から242名の応募がありました。

厳しい予備審査(6月3～6日、本学)を経て参加が認められた出場者は、13ヶ国88名。まず第1次予選では、自らが得意とするアリアを2曲歌います。バロックから近・現代に至る名アリアの数々を一度に鑑賞することができるので、オペラファンの方はもちろん、オペラが初めてという方にも楽しんでいただけます。

続く第2次予選では、出場者がオペラの一役を選び、審査委員から指定された様々な場面を歌い演じます。これは世界の声楽コンクールの中でも数少ない審査方法で、出場者の発声技術や表現力はもとより、オペラ歌手としての経験も同時に問われる難度の高い課題です。

そして本選まで進んだファイナリストは舞台にひとり立ち、オーケストラ・ピットでのオーケストラ伴奏のもと、4階まで広がる大ホールの観客に向け、2曲のアリアを歌い上げます。オペラの上演状況に近いこの形態の審査では、世界の歌劇場で

通用する声の響きや声量もまた必要とされます。

静岡から世界へと羽ばたく新たな逸材の誕生の瞬間に、ぜひ立ち会ってみませんか。観客が審査員となって選ぶオーディエンス賞もあります。

オペラ・サマーセッション2014 大盛況！

第7回静岡国際オペラコンクール開催記念として、『オペラ・サマーセッション2014』が7月27日(日)本学講堂で開催されました。

音楽の街浜松で開催されている2つの大きな国際コンクール、静岡国際オペラコンクールと浜松国際ピアノコンクール入賞者による夢の共演が実現しました。出演してくださったのは第6回コンクールで第3位及びオーディエンス賞を受賞した高橋絵理さん(ソプラノ)、同じく第3位受賞のイム・チャンハンさん(バリトン)、そして第8回浜松国際ピアノコンクール第3位及び室内楽賞受賞の佐藤卓史さんです。

高橋さん、チャンハンさんの迫力ある歌声や、佐藤さんのすばらしいブルグミュラーの演奏。そして佐藤さんのピアノによる2人の雰囲気あるデュエット。コンクール写真を見ながらの出演者トークもあり、盛り沢山の内容にほぼ満員のお客様は満足顔。最後は出演者とお客様全員によるセッションとなり、「カルメン」の闘牛士の歌で熱くコンサートは終了しました。

コンクール区分	席種	価格	チケットぴあPコード
第1次予選 開演 13:30 11/8(土)～11/10(月)	一般 自由 1階	¥500	227-097
	学生 自由 1階	無料(大学生以下)	
第2次予選 開演 13:30 11/12(水)～11/13(木)	一般 自由 1階	¥1,000	
	学生 自由 1階	無料(大学生以下)	
本選 開演 13:30 11/16(日)	一般 指定 1階	¥3,000	
	一般 自由 3・4階	¥1,500	
	学生 自由 3・4階	¥500(大学生以下)	
通しバス券(公式プログラム付) 11/8(土)～11/16(日)	一般 予選自由 本選指定	¥5,000	
入賞者記念コンサート 開演 19:00 11/18(火) 静岡音楽館AOI(静岡)	一般 自由 1・2階	¥1,500	227-103
	学生 自由 1・2階	¥500(大学生以下)	
入賞者記念コンサート 開演 19:00 11/20(木) 浜離宮朝日ホール(東京)	一般 自由 1・2階	¥2,000	
	学生 自由 1・2階	¥1,000(大学生以下)	

チケット案内(発売中)



本学4年生 石川聡太さん制作 第6回最高位(第2位)の吉田珠代さん



ソプラノ：高橋 絵理さん、ピアノ：谷池重袖子さん



インタビューに答えるイム・チャンハンさん



ゲストピアニスト：佐藤卓史さん



両コンクール3名による夢の共演

2013年度 研究事業等一覧

<特別研究>

学長特別研究、学部長特別研究（2学部）、研究科長特別研究（2研究科）、文化・芸術研究センター長特別研究の各領域の趣旨に沿った研究活動を行っています。研究テーマは毎年の学内公募に応じて教員が申請、学内の審査を経て採択を決定します。研究の期間は1年または数年に及び、テーマによっては専門分野の異なる教員、その他の研究者が共同で研究を行うこともあります。特別研究の研究成果は本学の研究紀要や研究成果発表会、学会での発表等を通じて広く情報発信するとともに社会へ還元しています。

No.	研究名	代表者		目的及び内容（特別研究申請書より）
		学科	氏名	
1	大学における地域貢献と活動拠点のあり方研究	国際文化	下澤 嶽	(1)既存の大学の地域貢献活動と活動拠点の網羅的な研究、(2)浜松地域での本学独自の地域貢献メニューの開発の在り方の研究をすることで、本学の地域貢献活動の将来ビジョンに資するとともに、研究に学生の参加を促すことで学生参加型の地域貢献研究を進める。
2	階級・文化・教育の視点によるアメリカ文学研究	国際文化	鈴木 元子	ソール・ベロー (Saul Bellow, 1915-2005) の文学を中心に、アメリカ文学を階級、文化、教育の視座から研究する。
3	近代人種概念の比較的研究 ——ドイツ・日本・中国	国際文化	孫 江	本研究の目的は、近代東アジアにおける「知の空間」の同一性と非同一性、具体的には、日中両国における人種概念の形成過程について考察することにある。
4	英語・中国語センターを中心に据えた効果的な英語教育システム構築 —カリキュラム作成と課外での学習支援・イベントに焦点をあてて—	国際文化	Mark D. Sheehan	英語教育強化のため、 ・ヨーロッパ言語参照枠に準拠した大学独自の到達度評価を構築し、その妥当性の検証をする。 ・学習者の興味・関心をグローバル・グローバルに活躍する力へと繋げる学習支援・イベント実施をする。
5	静岡県域の文化財防災と地震津波資料の研究	国際文化	磯田 道史	静岡県域で想定される地震災害・津波被災について、地元自治体等と連携しながら歴史学の視点から、対策をすすめていく。
6	多文化環境に生きる子どもの教育達成支援策をめぐる研究	国際文化	池上 重弘	本学に在籍するブラジル人学生たちの持つ潜在力を存分に生かし、多文化環境に生きる子どもたちが日本社会で教育達成するために地元公立大学としてどのような支援が望ましいかを実践的研究を通じて明らかにする。
7	ピアノ工房『大橋ピアノ研究所』のアーカイブ作成のための調査研究	文化政策	根本 敏行	浜松市博物館に寄贈された大橋ピアノ研究所の収蔵資料をもとに、浜松の地場産業であるピアノ工房の産業遺産としての資料を整備する。
8	浜松市の中山間地域における「空き家」の管理状況についての研究：浜松型「空き家バンク」の制度構築のために	文化政策	船戸 修一	浜松市では中山間地域の定住者を増やすために「空き家バンク」を創設しているが、その登録数は5件に過ぎない。そこで空き家が貸し出されない理由を聞き取りやアンケート調査から明らかにし、その制度構築を図る。
9	旧東欧地域における産業遺産の保全と利活用に関する研究	文化政策	四方田雅史	先進国を中心とした産業遺産研究に比べ、旧東欧に関する研究は少ない。また、旧東欧は、複雑な歴史から西欧・日本と異なる歴史的環境にある。本研究は、旧東欧の産業遺産利活用の現状を研究し、日本への教訓を得ることが目的である。
10	国産米を活用した非常食（地震防災対策）の開発	文化政策	米屋 武文	非常食として最も一般的な乾パンは、残念ながら“硬くて美味しくない”という負の評価が定着している。また主原料の小麦が100%輸入であることも問題である。国家の一大危機に備える非常食を輸入原料に頼らず、国産原料で作る、かつ食べやすいものが必要であるとの観点から、本研究では唯一完全自給可能な作物であるコメを活用し、食べやすくして美味しい非常食の開発を目指すものである。
11	わが国の対外文化施設の現状と課題 —パリを中心に—	芸術文化	松本 茂章	わが国の対外文化政策研究の一環として、パリ日本館を現地踏査する。関係者から聞き取り調査を行い、文献を収集して、運営実態の把握を進める。変遷を明らかにするとともに、老朽化のなかで存続の可否を調査する。
12	我が国の芸術団体・文化施設等の経営状況に関する基礎的研究	芸術文化	片山 泰輔	国や自治体における政策的検討や民間の経営推進の基礎となる経営情報を継続的に体系的に収集し、様々な政策研究、マネジメント研究の基盤を整え、我が国における研究拠点としての本学の地位を確かなものとする。
13	グローバル時代における日本文化発信力強化研究	芸術文化	梅若 猶彦	日本文化発信力強化の方法を探ることを目的に、フィリピン大学国際センターにおいて国際会議「日本の文化外交における交流媒体としての能」が開催される。能と西洋演劇を専門とする本学教員2名がこれに参加し、研究発表を行う。

No.	研究名	代表者		目的及び内容（特別研究申請書より）
		学科	氏名	
14	生活文化の形成における家事家電製品のデザインと広告の変遷	生産造形	伊豆 裕一	電気釜に代表される家事家電の普及におけるデザインや広告の変遷に焦点を当てることで、戦後の日本人の生活文化の形成におけるそれらの貢献を明らかにする。それにより関連産業の今後の商品開発に向けた提言を行う。
15	文化芸術による地域資源発信事業の研究	生産造形	磯村 克郎	多岐に渡る地域住民の活動と芸術文化が連携した地域資源の発信・発展プロジェクトの実施を通して、芸術文化の他分野への波及力と、現場でのマネジメント、デザイン人材育成の可能性を検証する。
16	浜松の民芸運動の現代的評価に向けて（その1）	生産造形	黒田 宏治	浜松地域における民芸運動関連資料・情報を掘り起こし、民芸運動史、近代デザイン史における役割や位置づけを探究する。
17	専門科目への英語教育導入に関する研究	生産造形	峯 郁郎	本学の専門科目に対して英語教育を導入することにより、実践的な英語教育プログラムの確立を目指し、国際人教育の充実を図るとともに、国際人育成機関として対外的なイメージアピールを狙う。そのための学習プログラムと学習ツール（教科書）を作成する。
18	地域特性を生かした持続性のあるデザイン開発研究	生産造形	谷川 憲司	地域に根ざしたデザインセンター機能として、地域視点・顧客視点・環境視点の側面から次世代の商品とモノづくりのあり方を探求し、企画デザインの側面から地元中小製造業が自ら事業開拓するための支援を行う。
19	ユニバーサルデザイン講義録・演習記録資料化研究	生産造形	永山 広樹	これまで開講のユニバーサルデザイン講義・演習記録の編集と校正、および歴任教員による補筆を行い、本学のユニバーサルデザイン講義・演習記録とする。さらに、これをもとに本学刊行の書籍とすることを目的とする。
20	紙とデザインのいままで、これから①	生産造形	佐井 国夫	ネット社会の進展の中で、ビジュアルデザインの脱・紙化（非印刷媒体化）、環境問題との兼ね合いの中でのパッケージの簡素化（省資源化）など、紙媒体のあり方についての検討が求められている。本研究は、静岡県の特徴ある地場産業分野である紙とデザインの関わりに焦点をあて、両者の関連の近現代の足跡を概観するとともに、これからの紙デザイン文化の展開の一端の展望に資することを目的とした。
21	デザイナー育成のためのスケッチングツールの開発研究	メディア造形	長嶋 洋一	発展的なデザイン領域として、インタラクション（システム）までをデザインできるような、「スケッチング」という新しいデザイン手法のための教育ツール（ハードウェア、ソフトウェア、テキスト）を研究開発する。
22	デザイン学部におけるユーザインタフェースデザイン研究・教育のあり方	メディア造形	的場ひろし	主にメディア造形学科内で行われているユーザインタフェース系の研究・教育が扱う対象を、本学部全体に関わる領域に拡張し、学部としてふさわしい研究・教育のあり方について方向性を見出す。
23	発達障害児のためのデジタル教科書のデザイン（第三次）	メディア造形	宮田 圭介	発達障害児には、物語読解において人物の感情や、「幸せ」や「死」など概念を理解することが困難である。そこで、動画やイラストを用いて感情や概念を可視化して、理解が支援できる教科書デザインの提案を行う。
24	海浜都市創生と既存市街地再生・浜松2014	空間造形	寒竹 伸一	浜松海浜地区に大堤防計画を利用した新しい水上都市を提案し、その新しい都市空間創出にリンクする浜松既存市街地の減築・低層・緑化再生手法を研究し、具体的な新都市像を提案する。
25	本学のユニバーサルデザインの推進に関する研究	空間造形	古瀬 敏	UDに関わる研究・開発ならびに情報発信を行い、特に地域におけるUDの推進に寄与する。本学教員の持てる能力を総合的に組み合わせることで社会からの要請に応えることができることから、課題に対して積極的に提言を行う。
26	SUACにおけるBCP策定の為の基礎的研究	空間造形	中野 民雄	本学の震災・停電時における建物インフラ機能の動作確認及び建物・設備機器の診断・調査・分析を行い、SUACにおけるBCP(Business Continuity Plan)策定のための基礎的資料とする。
27	ピアノ製造アーカイブに関する研究	文化・芸術研究センター	富田 晋司	20世紀初頭に始まる浜松のピアノ製造は、世界的にもユニークな「楽器産業都市」としての浜松の特徴を決定づけるものとなった。中小ピアノ製造業者にも焦点を当てつつ、浜松におけるピアノ産業の展開を明らかにする。

<イベント・シンポジウム等>

地域への情報発信、地域貢献などを目的に本学主催によるイベント、シンポジウム等を開催しています。学内公募に応じて教員が申請、学内の審査を経て採択を決定します。イベント等の企画・運営は担当の教員が中心となり、プロジェクトによっては本学学生が企画、運営のスタッフまたは参加者として加わることがあります。

No.	イベント名	代表者		目的及び内容（イベント事業申請書より）
		学科	氏名	
1	小学校の外国語活動支援：学生による授業実践	国際文化	Mark D. Sheehan	地域の小規模小学校にて、学生が大学教員指導のもと低、中、高学年別の授業準備実践を行う。 ・英語教員を志望する学生のキャリア支援（教育の充実） ・大学での多文化共生、第2言語習得を生かし、地域小学校の英語教育に貢献する。（地域貢献）
2	企業の社会貢献フォーラム はままつ「社会を変える企業のチカラ」	国際文化	下澤 嶽	本学の「浜松地域における社会貢献研究」の研究成果を関心ある市民に伝える。浜松地域の企業の社会貢献活動を客観的に評価し発表することで、企業の社会貢献に関心ある層のネットワーク化を推進する。（2013年7月12日開催 於：クリエート浜松）
3	お芝居出前プロジェクト寄せ書き展示	国際文化	池上 重弘	全国最多のブラジル人が暮らす浜松市で、市民レベルでの相互理解を深め、双方の出会いと交流の機会をつくる。 ・日伯両国で実施したお芝居出前プロジェクトの来場者の寄せ書きを展示。（2013年10月11～20日開催） ・シンポジウムを開催し、2年間の研究成果を発表する。（2013年10月12日開催）
4	<展覧会>詩人・吉増剛造のブラジル	国際文化	土肥 秀行	日本の詩人の最高峰に位置する吉増剛造（1939年生まれ）を通して見たブラジル像を、韻文、写真、映像を使って紹介する展覧会である。改めてブラジル文化の奥深さを認識することが目的である。尚、本研究の一環として特別講演会「詩人 吉増剛造 講演会 映像とともに」を開催。（2014年1月24日）
5	第16回絵本学会大会及びユニバーサルデザイン絵本コンクール2013	文化政策	林 左和子	身体的、知的特性や年齢文化などを越えて、いろいろな人が一緒に楽しむことのできるUD絵本コンクール及び応募作品の展示を行う。またUD特別研究と連動し、UD絵本をテーマにしたワークショップを開催する。（作品展示会：2013年11月9～17日）
6	「静岡文化芸術大学の室内楽演奏会2013」 含「バンバン！ケンバン♪はままつ」	芸術文化	梅田 英春	2006年以降の「室内楽演奏会」、2012年の「バンバン！ケンバン♪はままつ」を継承する音楽演奏・普及事業を展開する。新監督のもと少人数でさらに多様な音楽演奏プログラムを実施する。2013年度は次の4公演を実施。①相山久美レクチャーコンサート～弦楽四重奏の世界（2013年6月1日）②青銅の響き バリ島の四音階のガムラン・アングルの世界（2013年7月20日）③バンバン！ケンバン♪はままつ2013（2013年10月26日）④相曾賢一朗ヴァイオリン・リサイタル（2013年11月26日）
7	オペラ「カヴァレリア・ルスティカーナ」上演	芸術文化	高田 和文	「日本におけるイタリア2013年」の事業として行われるオペラ「カヴァレリア・ルスティカーナ」の上演を本学講堂で実施する。優れた歌手、演出によるイタリアオペラを本学で実施することにより、学生と地域市民に本物の芸術に触れる機会を与え、本学の存在を広く一般に知らしめる。（2013年9月26日開催）
8	プロと卵のエコデザイン展2013	生産造形	谷川 憲司	日本インダストリアルデザイナー協会主催「プロと卵のエコデザイン展」に参画し、作品を展示会で発表する。昨年度は本学から教員1名と学生3名が参加し、学生2名は奨励賞に選出された。（昨年度はプロ17名、学生12校38名が参加。）（2013年11月28日～12月17日）
9	メディアデザインウィークの開催	メディア造形	的場 ひろし	昨年度実施のメディアデザインウィークの実績に基づき、大学間の交流と、相互啓発を特徴とする成果発表会を開催する。昨年度はメディア造形学科の単独開催だが、今年度は3学科の共同開催、大規模化の方向で検討する。（2014年2月2～8日）
10	イブニングレクチャー2013	空間造形	中山 定雄	業界のトップランナーを招聘した特別講義を通じて、浜松発のデザインムーブメントの発信、本学のプレゼンスのアピール、市民と学生の交流等をクリエイトするとともに、学生のキャリアデザインへも繋げることを目的とする。2013年度は次の2回を実施。①三沢厚彦（彫刻家・2013年11月8日）、②浅葉克己（アートディレクター・2013年12月16日）
11	T D W（東京デザイナーズウィーク）2013学生展	空間造形	中山 定雄	本年が4年目の参加である。学生が大学の看板を背負い、全国レベルのデザインに触れ、自分たちのデザインを発表し、他校やプロと交流を広げる。全国の有名芸大・美大、約50校が参加し、それぞれの分野で講評会や採点が行われ、評価される。（2013年10月26日～11月4日・ASIA AWARDS 学校作品展 個人賞部門セミグランプリ他受賞多数）

<地域貢献・連携事業>

本学の教育・研究の成果を公開講座やフォーラム等の開催を通じて情報発信するとともに、地域社会へ還元しています。

No.	イベント・事業名	内 容
1	特別公開講座「薪能」(2013年10月8～10日)	第一夜 能講座 第二夜 現代劇「喫茶店」 第三夜 薪能「葵の上」
2	前期公開講座「文化の接触と変容の現場へ」 国際文化学の第一歩 (2013年6月8日～7月6日・全5回)	第1回：インターカルチュラル？ 国際文化学の構想と射程 (馬場孝／国際文化学科) 第2回：日本語における言語文化の型の発見 CMに見る日本語のおもしろさ (広瀬英史／国際文化学科) 第3回：マンガとアニメのグローバル化を考える (白石さや／外部招聘) 第4回：フェアトレードは世界を変えるか？ 国際文化学の実践 (下澤嶽／国際文化学科) 第5回：柔道からJudoへ 女子柔道強化選手の告発を「国際文化学」から読み解く (溝口紀子／国際文化学科)
3	後期公開講座「デザインの最先端」 (2013年11月16日～12月21日・全5回)	第1回：これからのプロダクトデザイン (峯郁郎／生産造形学科) 第2回：メディア・デザインの進展とその未来 (長嶋洋一／メディア造形学科) 第3回：建築・環境デザインの新たな試み (亀井暁子／空間造形学科) 第4回：広がるデザインワールド (伊豆裕一／生産造形学科) 第5回：国内外におけるユニバーサルデザインの試み (古瀬敏／空間造形学科)
4	夏季手作り公開工房(2013年8月24～25日、31日)	夏季：①石膏デッサンを描く (山本一樹／生産造形学科) ②光具vol.22 ピンホールカメラ (佐藤聖徳／メディア造形学科) ③揺れる彫刻 モビール (峯郁郎／生産造形学科) ④テキスタイル 手織り (種村 興治、桑原 壽子／外部招聘)
5	春季手作り公開工房(2013年3月22～23日)	夏季：①石膏デッサンを描く (山本一樹／生産造形学科) ②光具vol.23 焚き火照明 (佐藤聖徳／メディア造形学科) ③揺れる彫刻 モビール (峯郁郎／生産造形学科) ④テキスタイル 手織り (種村 興治、桑原 壽子／外部招聘)
6	特別連続講座「オペラを観てみよう」	オペラを観てみよう～オペラは決して難しいものではない！その魅力を探る 講師：三枝成彰 (作曲家 文化・芸術研究センター長) 第1回 三枝成彰「KAMIKAZE」(2013年7月1日) 第2回 ヴェルディ「オテロ」(2013年7月25日) 第3回 モーツァルト「フィガロの結婚」(2013年11月25日) 第4回 ワーグナー「トリスタンとイゾルデ」(2013年12月17日)
7	特別公開講義「スペインそしてヨーロッパにおける高齢者の住宅事情」(2014年1月30日)	講師：Jorge Bosch Meda (静岡文化芸術大学 客員研究員)
8	地域貢献特別講座「ノルウェーの木の文化」(2013年12月6日)	講師：川口宗敏 (空間造形学科)
9	多文化子ども教育フォーラム	第5回 教育支援策をめぐって当事者が物申す (2013年6月22日) 第6回 ポルトガル語での討論会Ⅳ(2014年1月11日) 第7回 これからの日本語教育を考える(2014年3月1日)
10	特別公開講演会「インドネシアの文化と教育」(2013年4月22日)	講師：アグス・スヘルマン・スルヤディムリア (パジャジャラン大学文学部日本語日本文学教授)
11	SUAC多文化プロジェクト 特別講演会「ブラジルの日本語メディアから見た日系人社会」(2013年10月11日)	講師：深沢正雪 (ブラジル・サンパウロ在住 ニッケイ新聞編集長)
12	えほん森の演奏会「親子で楽しむ朗読コンサート」(2013年7月24日)	演奏：榊原利修／コントラバス (セントラル愛知交響楽団) 榊原祐子／ピアノ

<出版助成>

本学教員が学術研究の成果を公開するための出版について、学内公募により助成しています。

	著 者	内 容
1	鈴木元子 (国際文化学科)	『ソール・ペローと「階級」－ユダヤ系主人公の階級上昇と意識の揺らぎ』彩流社 2014年2月
2	永井聡子 (芸術文化学科)	『劇場の近代化－帝国劇場・築地小劇場・東京宝塚劇場－』思文閣出版 2014年3月

<本学における学会開催>

	名 称	本学担当者
1	第24回日本経済思想史研究会全国大会 (2013年6月1～2日)	四方田雅史 (文化政策学科)
2	第16回絵本学会静岡大会 (2013年6月15～16日)	佐井国夫 (生産造形学科)
3	第64回東洋音楽学会大会 (2013年11月9～10日)	梅田英春 (芸術文化学科)
4	移民政策学会 2013年度冬季大会 (2013年12月14日)	池上重弘 (国際文化学科)

○文化芸術セミナー「浜松 楽器の事典 ピアノ編」

第1部：楽器トーク 第2部：名曲ライブラリー
 開場：17時50分 開講18時20分 会場：静岡文化芸術大学講堂
 <入場無料・申込不要>
 ピアノ 石井 園子

	期 日	楽器トークテーマ	コメンテーター	名曲ライブラリー
第3章	10月17日(金)	ピアノを作るⅡ	峯 郁郎	リスト、ブラームス、チャイコフスキーなどの作品
第4章	11月14日(金)	ピアノの調律と調律師	杉森 重夫	フォーレ、ドビュッシー、ラヴェルなどの作品
第5章	12月17日(水)	楽器産業と創造都市	根本 敏行	ラフマニノフ、バルトーク、プロコフィエフ、滝廉太郎、坂本龍一などの作品

※第1章、第2章は終了
 お問い合わせ 地域連携室 053-457-6105

○佐藤優 招聘客員教授 特別講演「生きる力」

日時 11月1日(土) 13時30分～15時
 会場 静岡文化芸術大学講堂(雨天時は南176大講義室)
 講演者 佐藤優(招聘客員教授)
 座談会 熊倉功夫(学長) 佐藤 優 磯田道史(国際文化学科)
 ※当日正午より講堂前にて整理券(200枚)配布(対象/高校生以上)
 お問い合わせ 教務・学生室 053-457-6114

○バンバン! ケンバン♪はままつ2014

日時 11月15日(土) 12時～17時45分
 会場 総合演習室、文化・芸術研究センターホール ほか
 内容
 コンサート(有料) ①アコーディオン ②マリンバ ③アップライトピアノ
 コンサート(無料) ①大正琴 ②鍵盤ハーモニカ
 ワークショップ「マリンバ」
 シンポジウム テーマ「電子鍵盤楽器」
 <チケット>
 フリーパス(前売のみ) 一般1500円 親子1000円 学生1000円
 1公演(前売・当日とも) 一般 800円 親子 600円 学生 600円
 (中学生以下は無料)
 ※「親子」は中学生以下のお子様同伴の保護者様1名が対象
 ワークショップとシンポジウムは無料
 お問い合わせ 地域連携室 053-457-6105

○研究成果発表会

日時 12月4日(木) 15時30分～18時30分(予定)
 会場 南280中講義室
 <入場無料・申込不要>
 お問い合わせ 企画室 053-457-6113

○後期公開講座「創造都市ボローニャの魅力を探る」

12月6日(土) 13時～16時45分 会場：南281講義室
 ①「ものづくり」都市 ボローニャの秘密 根本 敏行(文化政策学科)
 ②ボローニャのブックフェア 林 左和子(文化政策学科)
 12月20日(土) 13時～16時45分 会場：南378講義室
 ①17世紀ローマとボローニャ派の画家たち 小針由紀隆(芸術文化学科)
 ②ボローニャ大学都市の歴史と現在 武田 好(国際文化学科)
 創造都市ボローニャの文化と文化政策 高田 和文(芸術文化学科)
 (高校生以上対象)
 受講料 1日(2講座)1,000円 高校生無料
 お問い合わせ 地域連携室 053-457-6105

編集後記

文化・芸術研究センターのニュースレター『文化と芸術』は2004年7月に第1号(Vol.1)が発刊されて今年で10周年、今号で20号(Vol.20)となりました。毎年2号ずつという頻度ではありますが、着実に号を重ね、今号は初めて前年度の研究事業等を一覧で紹介するページをプラスし、全12ページの構成となっています。Vol.1から一貫している編集方針は本学の研究・事業活動等を学内外に「広く」「わかりやすく」紹介、広報することです。「広報」とは一方的な宣伝、情報伝達ではなく、社会とのコミュニケーション行為であり、本学の「研究資源群」が社会の中で積極的な役割を果たしていくために極めて重要な機能であると考えています。(St.)



発行人：高田和文 編集人：冨田晋司
 発行：静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター
 (事務局 静岡文化芸術大学 企画室)

